

〔研究報告〕

コミュニケーションスキルの向上が子どもの対人関係に及ぼす効果

小 玉 有 子¹⁾

要 旨

自分の考え・思い・感情を上手く表現できないために、対人関係を上手く構築できない子どもが増えている。今回、コミュニケーションに多くの課題を抱えた小学2年生18名に対し、コミュニケーションスキルトレーニングのプログラムを作成し、実践した。実施前のアセスメントでは、Q-Uの結果、学級崩壊傾向が見られ、日常トラブルが絶えなかった。プログラムは、アサーショントレーニングを中心とした7時間の授業形式の一斉指導、効果を持続させるためのサポート的な取り組みである。授業では、筆者らが作成したワークシートをもとに、教師によるロールプレイ、グループ活動、児童たちによるロールプレイを多用した。7時間の授業の後、再度実施したQ-Uでは、全員が学級満足群に入り、学力の向上もみられた。コミュニケーションスキルが向上することにより、対人関係に改善が見られ、学級満足感が増し、安定した人間関係が、より良い学習環境作りにも影響したものと考えられる。

キーワード：コミュニケーションスキルトレーニング 対人関係 学級満足度 学習環境

I. はじめに

近年、自分の考え・思い・感情を上手く表現できない子どもが増加している。明石(1998)が中央教育審議会の答申で指摘してから、10年以上経つが、子どもたちのコミュニケーションスキル不足の状況は、改善されているとは言えない。加えて、軽度発達障害の疑いがある児童生徒の割合も増加傾向にあり、衝動的で攻撃的な方法で自己主張する子どもの増加も、社会問題となっている(豊田,2000)。しかし、学校現場では、学力向上や小学校における英語教育の導入等によるゆとりのなさに加え、知識不足等から、子どもたちの課題に気がついていても、課題解決の方策を検討することが難しい教師も多く、コミュニケーションスキルトレーニングの実施は困難な現状にある。

しかし、松本(2009)の報告からも、小学校低学年からのスキルトレーニングの導入は、有効であり、小学校における基本的な生活習慣を定着させる時期に、コミュニケーションスキルを獲得させることは、その後の小中学校生活における人間関係や学習に、大きな影響を与える

と思われる。本研究では、コミュニケーションスキルトレーニングが、学級集団の対人関係および学習環境に及ぼす効果について、明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象

A県の農村地域、児童数100名以下の小規模校(筆者勤務)の2年生18名(男子11名、女子6名)を対象に実施した。抽出方法は、全校教員にコミュニケーションスキルトレーニングの概要を説明し、担任教員より実施希望があったクラスの児童を対象にした。

2. 研究期間

200X年6月～200X+3年3月

3. 研究方法

1) コミュニケーションスキルトレーニング実施前アセスメント

(1) Q-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)

1) 弘前医療福祉大学 保健学部 医療技術学科(青森県弘前市小比内3丁目18-1)

河村, 1998, 以後Q-Uと記す)(1回目)200X年
6月実施

(2)教育相談アンケート

200X年9月実施。質問項目は「興味関心があること」「友人関係に関すること」「学習に関すること」「学習以外で困っていること」についてである。

2)指導プログラム作成と実施

(1)指導目標

- ・アサーティブな表現(相手の気持ちを考えながらも, 自分の気持ちを大切にしたい自己主張)の良さに気づき, 日常生活で使うことができる。
- ・相手の気持ちを考えながら自己主張することで, 円滑な人間関係を築くことができる。

(2)指導期間

200X年9月~200X+1年2月

(3)指導計画および内容

指導計画は全7時間で, 特別活動の時間を利用して行った。指導案は, 鈴木教夫氏作成の指導案および「教師のためのアサーション」(園田他2002)を参考に, 児童の実態にあわせて, 担任と検討して作成した。指導内容は, アサーティブな表現の理解と実践のためのプログラムと, 話す・聞くに関するスキルアップ, お互いを認めあえるようになるための工夫を取り入れた(Table 1)。指導形態は担任と筆者のチームティーチングで行った。

5回目以降の授業では, 筆者らが作成したワークシートを使用した。問題の作成にあたっては, 日常ありそうな場面を想定したが, 一部は, 休み時間の児童の会話を参考にして作成した。授業では, 例題の場面を, 筆者と

担任が, 日常の児童の実態にできるだけ近づけてロールプレイを行った。その後, 児童がグループ活動で, ワークシートにアサーティブな台詞を書き込み, グループの代表が, 同じ場面を再度アサーティブな表現を用いてロールプレイを行った。授業展開例をTable 2に示す。

(4)その他の取り組み

基本的な話し方のルールや, 聞く態度を育成し, 授業形式で行われたコミュニケーションスキルトレーニングの効果を持続させるために, 学校生活の様々な場面で, コミュニケーションに関するトレーニングを継続した(Table 3)。

3)コミュニケーションスキルトレーニング実施後の評価

(1)Q-U(2回目)

200X年12月, 7回の授業終了後に実施

(2)担任からの聞き取り

児童の質的变化に関して, 担任にインタビューした。

(3)学力の変化

200X年4月実施の教研式新学年別知能検査と教研式標準学力検査(NRT)の結果と, 200X+1年4月, 200X+2年4月実施の教研式標準学力検査(NRT)の結果を比較した。

(4)トレーニング実施直後および2年後の児童の意識調査

トレーニング終了時の200X+1年3月と, 終了から約2年後の200X+3年3月に, 指導内容をどの程度覚えていてるか, 質問紙にて調査した。

Table 1 特別活動計画(全7時間)

時間数	活動名	ねらい
1 9月	○「みかんでいいな」の話し方で言ってみよう。(DESC法)	・「みかんでいいな」の話し方を知り, 日常生活のいろいろな場面でどのように話したらいいのか考えることができる。
2 10月	○「のび太」「ジャイアン」「しずかちゃん」の話し方の特徴を考えよう。	・3つの話し方の特徴を知り, 言われた人の気持ちを考えることができる。
3 10月	○「しずかちゃん」の話し方のひみつを見つけよう。	・3つの話し方を比べ, しずかちゃんの話し方の特徴を見つけることができる。
4 10月	○「しずかちゃん」の話し方をまねしてみよう。	・アサーティブな表現パターンをまねすることができる。 ・「ジャイアン」や「のび太」の言葉をしずかちゃんの話し方に直すことができる。
5 10月 公開授業	○「しずかちゃん」の話し方で言ってみよう。 *日常場面を想定したワークシート使用	・日常生活で困った状況に置かれた時の話し方を考えたり, そのよさを感じることができる。
6 11月 公開授業	○自分の言い方を振り返ろう。(学校生活編) *児童の日常会話からワークシート作成	・今までの自分の言い方はどのタイプだったか考えさせ, 自分のことも相手のことも考えた話し方をしようとする。
7 12月 参観授業	○自分の言い方を振り返ろう。(家庭生活編) *家庭での親子会話からワークシート作成	・家庭場面での言い方を親子で考え, 親も子も, どちらも相手のことを考えた話し方をしようとする。

Table 2 授業の展開例

活動内容	指導上の留意点（・） 評価（◎）
<p>○しずかちゃんの話し方の特徴を復習する。 ○今日の活動について知る。</p>	<p>・ 掲示物を見ながら確認する。 ・ みんなが困ったとき、何とさえいいのかを考えることを話す。</p>
<p>〈練習問題〉 じゅうぎょう中、となりのせきのたけし君がしずかちゃんに「じょうぎをかして。」と言ってきました。でも、しずかちゃんは、じょうぎが1つしかないのに、それをかしてしまつと、さぎょうがおくれてしまいます。 その時、しずかちゃんはどのように言うと思いますか。</p>	
<p>○〈しずかちゃんの話し方〉を思い出す。 「ごめんなさい……。」 「○○さん、～しましょう。」 ○発表する。 ○次の3つの問題を理解する。</p>	<p>・ 3つのグループで話し合わせる。 ・ T1、T2は各グループの話し合いでうまくできていないところにアドバイスする。 ・ グループの代表の児童に発表してもらう。 ・ みんなが普段困っていることの中から各グループにワークシートを配る。 ・ 状況を理解させるためにT1、T2でロールプレイを行う。</p>
<p>〈問題1〉 学習係のA君が朝、宿題プリントを名簿順に並べています。すると、だいぶ遅れてB君が「あっ。出すの忘れてた。」と言って、プリントを給食台の上におきました。遅く出す人がいるとプリントを整理するのに時間がかかってしまうので、A君はいつも困っています。A君は何とさえいいのでしょうか。</p>	
<p>〈問題2〉 今日、Aさんは風邪気味です。あまり体調が良くないので、中休みは「かいけつゾロリ」の本を読もうと思っていました。でも、Bさんが「ねえ、おにごっこしよう。」と手をひっぱりました。Aさんは、本当はおにごっこをやりたくありません。Aさんは何と言って断つたらいいのでしょうか。</p>	
<p>〈問題3〉 A君は、校庭でサッカーをして遊ぼうと思ひ、ボールを持って友だちを待っていました。すると、5年生のB君に「そのボール、使わないだったらかして。」と言われました。A君はそれがないと、友だちとサッカーができません。 A君は何とさえいいのでしょうか。</p>	
<p>○〈しずかちゃんの話し方〉を思い出しながら、グループで何とさえいいのか話し合う。 ○考えた言い方を発表する。 ○発表を聞いた感想を発表する。 ○〈しずかちゃんの話し方〉をした感想を発表する。 ○先生のお話を聞く。</p>	<p>・ T1、T2は各グループの話し合いでうまくできていないところにアドバイスする。 ◎〈しずかちゃんの話し方〉で考えたり、話すことができたか。（観察） ・ 各グループの代表者（A役、B役）が発表する。 ・ T1・T2はグループの話し合いの様子から、良い意見は1つに限らず発表するようにアドバイスする。 ・ 感想は、話し方の良いところや、言われたときの気持ちでも良いことを知らせる。 ・ 数名の児童に発表してもらう。 ◎〈しずかちゃんの話し方〉のよさを感じることができたか。（観察、プリント） ・ 〈しずかちゃんの話し方〉を考えたり、真似して話したりできたことを褒め、今後の意欲づけをする。</p>

Table 3 その他の取り組み

活動内容	ねらい
○話し方・聞き方のルール（学級の約束）	・みんなが気持ちよくなる話し方・聞き方のルールを習得させる。 ・友だちから学ぶ態度を育成する。
○1分間スピーチ（朝の会）	・SWIHを使った話し方のルールを習得させる。 ・聴き方のマナーと、聞き取り方を習得させる。
○今日のぴかいち（帰りの会）	・友だちの〈良いところ探し〉から、お互いを認め合う態度を育成する。
○班対抗ビンゴゲーム（3分間）	・短時間に小集団で話し合う習慣や、話し合いのルールを習得させる。 ・学習が苦手な児童の活躍の場の設定する。 ・語彙を増やす。
○「み・か・ん・て・い・いな」の話し方（DESC法）	・授業中を含む毎日の学校生活で、必要な話し方のパターンの再確認と定着を図る。

4. 分析方法

トレーニング実施前後のQ-Uの評価は、Q-U評価専門ソフトを使用し、各項目の評価は、Exselを用いて、T検定した。

5. 倫理的配慮

本実践は、特別活動の一環として実施されたものであり、さらに担任教員が中心にチームティーチング実施していることから、特に許可を必要とするものではなかったが、実施校の校長に対しては、指導の目的および内容を説明し、実施の許可を得た。また、発表時には、実施校および個人が特定できないように配慮することを約束した。児童の保護者には、文書にて、実施内容および実施状況を伝え、指導期間中、質問や意見は、担任教師が随時受け付ける体制を取った。

Ⅲ. 結果

1. コミュニケーションスキルトレーニング実施前アセスメントの結果

1) Q-U結果(1回目)

学級満足度尺度結果では、学級生活満足群は3名17%のみで、非承認群は6名33%、侵害行為認知群は2名11%、学級生活不満足群は7名39%であった。学級不満足群にプロットされている割合が多く、また、プロットの状態から、崩壊しかけている学級集団の状態に近いものと思われた(Fig.1)。河村(2004)の報告にもあるように、この状態は、児童相互に不信感が発生しやすく、児童の情緒は不安定になり、学級はストレスフルな状態であると考えられた。

2) アンケート結果

「学習以外で困っていることは何か」という質問に対し、18名(100%)が「思っていることが言えない」「何を言っているのかわからない」「断れない」「誘えない」「頼み方がわからない」等、コミュニケーションに関する何らかの悩みを回答した。

2. コミュニケーションスキルトレーニング実施後の質的検討

1) 担任が感じた学級集団および個の変容

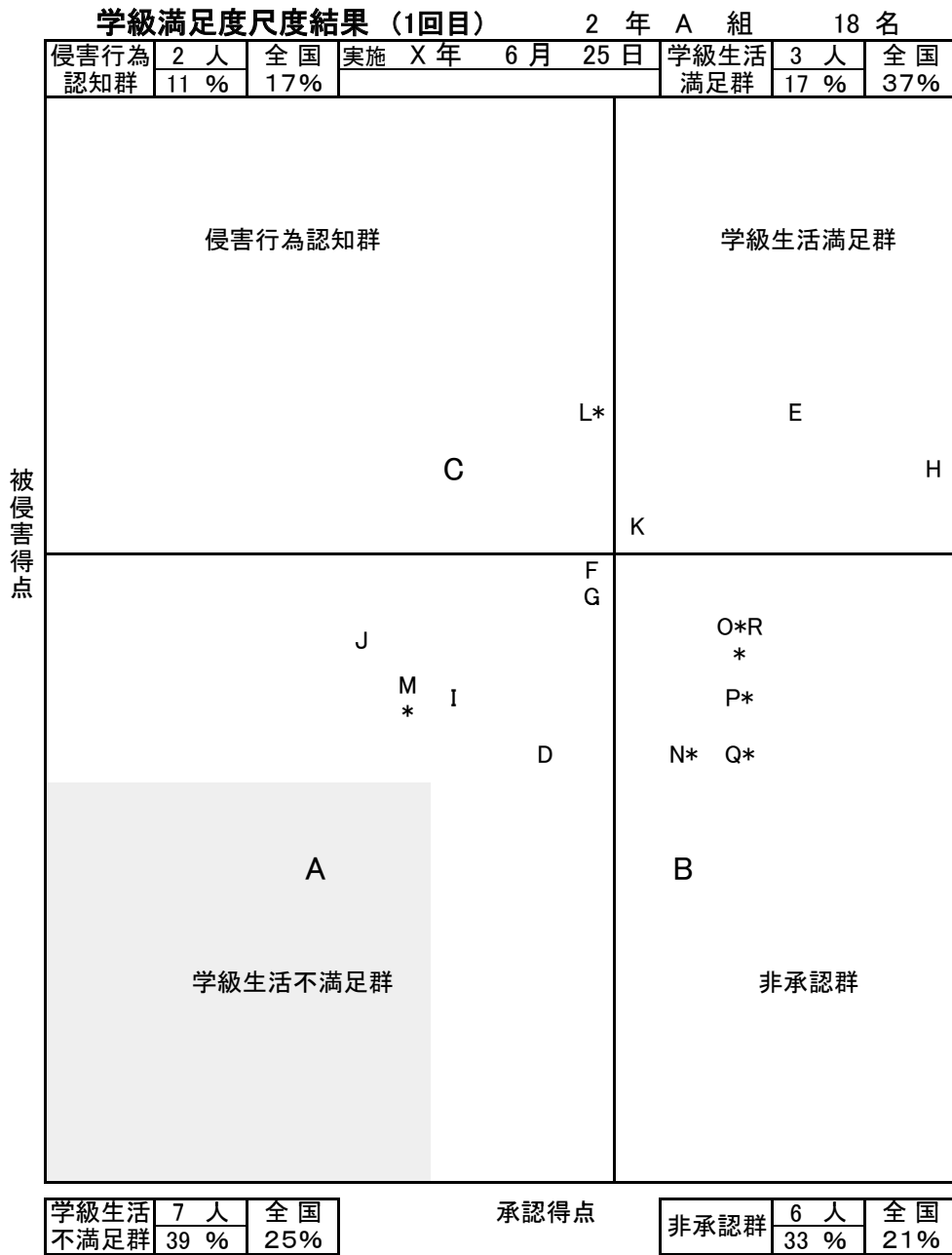
トレーニング開始当初、児童たちは、授業を実施した日は意識してアサーティブな表現をしていたが、数日経過すると、またもとのように、乱暴な言い方が増えていった。しかし、指導開始から3ヶ月後(授業形式の指導終了時)には、児童の変容は、担任以外の教員からも指摘されるようになった。この時点での、担任の主観の変容認識を、インタビューによりまとめた。

- ①乱暴な話し方をする児童が減少した。話し方を、児童同士で注意するようになった。
- ②学級内での、人間関係のトラブルが減少した。
- ③他人の話し方や善行を褒めるようになった。他学年児童の行動や話し方にも興味を示し、アサーティブな表現ができている児童を、高く評価するようになった。
- ④授業中の発表意欲が増加した。特に、国語の物語教材への取り組みには、高い意欲を示した。学習意欲は、全教科で向上したと感じる。

2) 児童の意識

トレーニングが終了後実施した質問紙による調査結果では、終了直後には、全項目で、全員が100%理解ある

Fig.1 Q-U (1回目) 結果



いは実践できていると感じていたが、200X+3年3月には、DESC法(「みかんでいいなの話し方」-事実・考え・提案と順序立てて話す方法)を、良く覚えている、だいたい覚えていると答えた児童は38.9%で、完全に記憶できていたものは、3名のみであった。DESC法を実践できていると感じているのは44.4%、「アサーティブな表現」(しずかちゃんの話し方)に関しては55.6%が実践できていると感じている。一方、「友達の気持ちを考えて話す」ことについては、72.2%が実践していると答えている (Table 4)。

3. コミュニケーションスキルトレーニング実施後の量的検討

1) Q-U結果(2回目)

結果は、学級生活満足群が100%であった (Fig.2)。1回目の結果と比較すると、すべての項目で有意差が認められた (table 5)。

2) 学力の推移

学力の推移に関しては、教研式新学年別知能検査と教研式標準学力検査(NRT)の結果の学級平均偏差値をもつ

Table 4 アサーショントレーニング実施後の児童の意識

質問項目	終了直後	2年後
○「みかんでいいな」の話し方（DESC法）を、おぼえていますか？	18名 100.0%	7名 38.9%
○ふだん「みかんでいいな」の話し方を、意識して話しているか？	18名 100.0%	8名 44.4%
○「しずかちゃんの話し方」（アサーティブな表現）で話すように、気を付けているか？	18名 100.0%	10名 55.6%
○友達の気持ちを考えて、話しをするようにしているか？	18名 100.0%	13名 72.2%

Fig.2 Q-U (2回目) 結果

学級満足度尺度結果 (2回目) 2年A組 18名

侵害行為 認知群	0人	全国	実施 X年 12月 5日	学級生活 満足群	18人	全国		
	0%	17%			100%	37%		
侵害行為認知群				CEK L* D N* R* F J Q* O* B H 学級生活満足群 G・I A P* M*				
				学級生活不満足群				
学級生活不満足群				非承認群				
				承認得点				
学級生活不満足群			承認得点			非承認群		
学級生活 不満足群	0人	全国		非承認群	0人	全国		
	0%	25%			0%	21%		

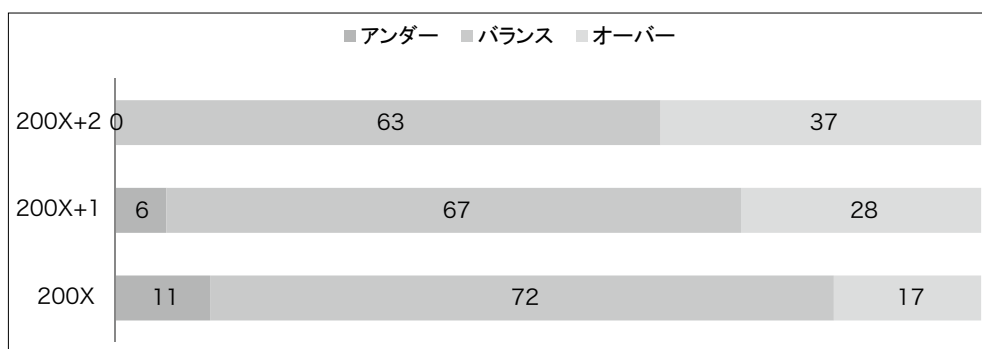
被侵害得点

Table 5 各項目の平均 標準偏差 t検定結果 n = 18

質問項目		1回目	2回目	t値
1 あなたは、運動や勉強でクラスの人から「すごいな」と言われることがありますか。	M	2.33	3.78	6.96 **
	SD	0.88	0.42	
2 あなたが失敗したときに、クラスの人には励ましてくれることがありますか。	M	2.2	3.56	6.5 **
	SD	0.63	0.5	
3 クラスの中に、あなたの気持ちをわかってくれる人がいますか。	M	2.28	3.61	5.34 **
	SD	0.87	0.68	
4 あなたが何かをしようとするとき、クラスの人たちは協力してくれると思いますか。	M	2.39	3.56	7.78 **
	SD	0.68	0.5	
5 クラスには、いろいろなことを進んで取り組む人がいますか。	M	2.78	4	9.19 **
	SD	0.53	0	
6 友だちはあなたの話を聞いてくれますか。	M	3.06	3.67	2.43 *
	SD	0.97	0.47	
7 クラスの人に、嫌なことを言われることがありますか。	M	2.78	1.61	-4.6 **
	SD	0.97	0.76	
8 クラスの人に、乱暴なことをされることがありますか。	M	2.67	1.33	-5.1 **
	SD	0.94	0.67	
9 学校に行きたくないことがありますか。	M	1.78	1	-3.4 **
	SD	0.92	0	
10 学校で、ひとりぼっちでいることがありますか	M	1.67	1.06	-3 **
	SD	0.82	0.23	
11 遊びの仲間に、入れてもらえないことがありますか。	M	1.94	1	-4.2 **
	SD	0.91	0	
12 あなたは、クラスの人たちから無視されるようなことがありますか。	M	1.83	1.06	-3.4 **
	SD	0.9	0.23	
承認得点	M	15.06	22.17	13.4 **
	SD	2.39	1.61	
被侵害得点	M	12.67	7.06	-7.4 **
	SD	3.37	1.08	

* p < 0.05 ** p < 0.01

Fig. 3 知能偏差値と学力偏差値との比較



て比較した。国語の平均偏差値は、2年次と3年次を比較すると3.5ポイント上昇し、4年次との比較では、2年次より6.4ポイントの増加が見られ、学力が向上している。また、算数でも同様に、学力の向上が認められた。総合的な学力では、2年次アンダー・オーバーが11%いたのに対し、4年次には0%となっている。オーバー・オーバーも2倍以上となった (Fig.3)。

IV. 考察

1. トレーニングプログラムの効果

本研究では、対象児童に学習内容の理解困難さが見られたため、トレーニングには十分時間をかけ、また、グループ学習での課題を明確にできるよう、ロールプレイを採用した。また、トレーニングを「教師のロールプレイ-グループ活動-発表」という同じパターンで展開し

たことは、児童に安心感を与え、自信を持ってトレーニングに参加できたと考える。本プログラムでは、授業形式のコミュニケーションスキルトレーニングをサポートする形で、「その他の取り組み」がなされたが、この取り組みが日常的に行われたことが、トレーニングの効果を持続・定着するのに、大いに役立ったと考える。ほとんどの児童は、トレーニングにより、自分の気持ちや伝えたいことを、ルールを守って表現できるようになった。スムーズに話せない児童がいても、待つ姿勢も見られるようになった。児童同士の会話に「〇〇君、うまく話せるようになったね。」「今の言い方、すごく良かった。」等、友だちを評価する言葉が出てきたのも、嬉しい変化である。

トレーニング終了2年後のアンケートでも、7割の以上の児童が「相手の気持ちを考えた話し方」を心がけていると答えている。詳しい学習内容は忘れていても、印象深く、心に残るトレーニングであったと思われる。

以上のことから、本研究で提案したプログラムは、低学年児童や、学習理解に困難を抱えている児童に対しては、有効なプログラムであったと考える。

2. 対人関係への影響

トレーニング前後に行われたQ-Uの結果から、短期間に学級がまとまった様子が伺える。コミュニケーションスキルの向上により、意志の疎通が良くなり、友人の話している内容もしっかり理解できるようになったため、以前のように誤解から生じるトラブルが減少したことが一因であると思われる。攻撃的な指摘が、他人を不快にさせていることも理解でき、友人に対してアサーティブな言い方を心がけるようになった。強い口調、攻撃的な指摘を「いじめ」ととらえていた児童たちは、被侵害感情がなくなっている。

3. 学習に及ぼす影響

「話し方のルール」がわかることで、人前で話すことへの抵抗感が減少したと思われる。教室の黒板の横には、DESC法を基本とした話し方のルールが貼られていて、授業中も、発表に詰まった児童は、それを見ながら発表していた。また、7回の授業の後半3回は、公開授業であったため、多くの教師が授業を参観した。終了後、児童たちは他校の教師に質問されたり、誉められたりし、得意な様子であった。「評価される喜び」を得ると共に自己評価上がったように感じた。この後、急激に授業中の発表が増え、国語の物語教材の授業等では、児童自らが、校長・教頭の授業参観を希望する場面もあり、学習意欲が増加した様子が伺えた。

一方、学力の推移に関しては、予想以上の向上が見られたが、本研究は、学力向上を目的として行ったもので

はなく、コミュニケーショントレーニング以外の、学習に影響を及ぼしたであろう要因については、今後検討が必要である。高橋(2006)は、児童のアサーションと「学級の規律正しさ」「学級への満足感」「学級活動への関与度」「教師への親近感」の学級風土因子に対する肯定的な認知には、有意な相関があり、学級風土を肯定的に認知している群ほどアサーティブなコミュニケーションを行おうとする意図が強いと報告しているが、アサーティブなコミュニケーションが推進されることによって、学級満足度が増し、安定した人間関係により、より良い学習環境を作ることができたのではないかと考える。

最後の授業は、保護者に公開した。アサーティブなコミュニケーションが定着するためには、家庭の協力が不可欠であると考えたからである。ロールプレイも親子の会話を再現した。家庭におけるコミュニケーションも不十分になっている昨今では、保護者がプログラムに参加できるような工夫が、もっとなされるべきであろう。今回はトレーニングに多くの時間を割いたが、今後多忙な教師のためにも、ショートホームルーム等の短時間で実践できる、効果的なプログラムの検討と、継続的な効果が期待できるトレーニング期間の検証が必要であると考ええる。

V. まとめ

1. コミュニケーションに課題が多く、対人関係にも問題の多い小学校2年生にコミュニケーションスキルトレーニングを6ヶ月実施した結果、アサーティブなコミュニケーションスキルが定着した。
2. 学級は、トレーニング以前は、Q-Uで学級崩壊型に近い状況を示していたが、トレーニング終了時には、全員が学級満足群に属し、学級の対人関係に大きな効果が見られた。また、担任の観察からも、コミュニケーション不足が原因と思われるトラブルが減少した。
3. コミュニケーションスキルの向上とともに、自信をもって学習に望む児童が増え、学級全体の学力が向上した。
4. トレーニング終了2年後、児童の7割が「相手の気持ちを考えた話し方」を心がけていた。

(受理日 2011年2月17日)

〈文 献〉

- ・小貫 悟・名越斉子・三和 採 「LD・ADHDへのソーシャルスキルトレーニング」 日本文化科学社 2004
- ・河村茂雄 「崩壊しない学級経営をめざして 教師・

- 学級集団のタイプでみる学級経営」 学事出版 1998
- ・ 河村茂雄・藤村一夫・粕谷貴志・武蔵由佳 「Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド 小学校編」 図書文化 2004
 - ・ 栗原慎二 「新しい学校教育相談の在り方と進め方」 ほんの森出版 2002
 - ・ 小林正幸 「学校でどう活用するか」 國分康孝（監）『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる』 図書文化 1999
 - ・ 鈴木教夫 「小学校教育とアサーション・トレーニング」 平木典子（編）アサーショントレーニング 現代のエスプリ 450 pp37-47
 - ・ 園田雅代・中釜洋子・沢崎俊之 「教師のためのアサーション」
 - ・ 高橋 均 「児童のアサーションと学級風土認知の関連」 学校教育相談研究第 16 号 日本学校教育相談学会 2006 pp12-18
 - ・ 平木典子 「自分の気持ちをきちんと〈伝える〉技術」 PHP 研究所 2007
「子どものための 自分の気持ちが〈伝える〉技術」 PHP 研究所 2009
 - ・ 松本直美 「心理アセスメントやグループ・アプローチを取り入れた小学校 1 年生の学級づくり」 学校教育相談研究 第 19 号 日本学校教育相談学会 2009 pp.41-52

Effects of improvement of communication skills on the interpersonal relationships of children

Ariko Kodama

Hirotsuki University of Health and Welfare (3-18-1 Sanpinai, Hirotsuki 036-8102, Japan)

Abstract

There is an increasing number of children who are not able to build interpersonal relationships well because they are unable to express their own ideas, thoughts and feelings well. A communication skill training program was produced and carried out with 18 children in the second grade of primary school who held many problems in communicating. In the pre-program assessment, the Q-U indicated that a tendency to a classroom breakdown was seen and there were endless daily troubles. The program comprises 7 hours of group coaching in the classroom centered on assertion, as well as supportive efforts to maintain the effects. In the classroom session, there was much use of roll playing by the teacher, group activities and role playing by the children, based on a worksheet produced by the authors. After the 7 hours in the classroom, a repeat of the Q-U indicated that all children were in the classroom satisfaction group and improvement of academic performance was also seen. It is thought that the improvement of communication skills resulted in improvements in interpersonal relationships which increased classroom satisfaction and that stable human relationships had an influence also on creating a better environment for study.

Key words : communication skill training interpersonal relationships classroom satisfaction
environment for study